

# 長老教中学校の子どもたちは何を夢見たか？

— 子ども期研究の視点から —

森 本 真 美

本稿は、イギリス子ども史研究の視点から、駒込武氏の『世界史のなかの台湾植民地支配—台南長老教中学校からの視座』で示される台南長老教中学校の生徒たちの子ども期について論点を提示するものである。

台南長老教中学校の退学者は林茂生にとっての悩みであったが、同校のキリスト教系コネクションを利用したグローバルな進路を得ることは、生徒や親にとっての個人の「夢」に踏み出した可能性がある。また台湾とゆかりの深いグリフィンや後藤新平が内地においてはスカウト運動を主導したにもかかわらず、台湾にはスカウト運動が導入されず、内地や朝鮮とは異なったかたちで少年団運動が展開した。

「帝国のはざま」で夢をしかと見据える長老教中学校の子どもたちの現実には、そのような帝国少年のイメージを、より自律的な存在とみることで書き換える可能性を持つものであるろう。

## 1 はじめに

駒込武氏の『世界史のなかの台湾植民地支配—台南長老教中学校からの視座』は、日本教育史、台湾教育史はもとより、イギリス帝国史研究の立場からも、さまざまな方向の示唆を得ることができる、奥行きと広がりのある力作である。本稿では、近年わが国においても国際的・学際的諸研究の協力・統合という段階から単独の研究領域としての認知を得つつある「子ども学」、とりわけその重要な焦点のひとつである「子ども期」研究の視点から、台南長老教中学校の生徒たちの子ども期について、考察と展開の可能性の一端をここで提示したい。

水谷智氏の論考と同様、本稿が焦点とするテーマも、同書で駒込氏が用いられている印象的なキーワード、「夢」である。なお、研究領域としては広義の子ども期に含まれるが、台南長老教中学校の生徒たちについては、十代前半から半ばという年齢を考慮して、以降は「少年期」という表現で述べるものとする。

## 2 少年期と「夢」

ヨーロッパの近代、とりわけ19世紀から20世紀初頭にかけては、教育・宗教・医学・心理学等、さまざまな立場から、子ども期とそのありかたをめぐる議論が展開された時代であった。

近代イギリスにおける子ども期の大きな変化はいくつかあるが、そのひとつはいうまでもなく教育が社会の下方にまで拡大したことである。ただし明治に入って西洋型の学制を一気に導入した日本とは異なり、イギリスの初等・中等教育の水準や到達目標は、階級と経済力を基調とした社会層に応じて規定されるのが現実であった。すなわち、中等教育として最高峰にあったパブリックスクールは、オクスブリッジをはじめとする高等教育＝大学への進学を前提とした古典教養と、支配エリートとなるべきこの学校に通う階層であるジェントルマンに相応しい人間性の醸成を重んじ、より低い社会層については、初等教育において経済的自立（女子の場合は家庭生活への備えを含む）のためのいわゆる3Rの基礎教育と授産指導が施された。前者について、ステイタスの上昇を望む中流階級の参入と、かれらの要請にこたえる実学系カリキュラムの導入という変化はあったものの、数々の改革が行われた19世紀を通じて、「分を越えない教育」という保守的な教育観は根強かった。

一方でめざましい変化を見ていたのが、子どもたちの「経済的自立」の手段である。工業化とそれにとまなう経済構造の転換、さらに都市化の進行がもたらした雇用構造の激変をうけ、子どもたちにとって親と同じ職業を継ぐことは、自明の未来ではなくなっていった。前述のような大前提はあったものの、1870年の初等教育法制定に前後する教育制度改革は、低い社会層の子どもたちの教育機会をたしかに拡充した。能力と野心のある子どもには道を開くこともあったし、それ以外の「普通の」子どもたちにも、そのような道を「夢」としてかいま見せた。ひと世代前に「夢」を体現した科学者・物理学者マイケル・ファラデー（Michael Faraday 1791-1867）や、製陶業のジョサイア・ウェッジウッド（Josiah Wedgwood 1730-1795）などの立身譚をとりあげたサミュエル・スマイルズの『自助論』（1859）は、勃興する中流階級のバイブルであったばかりではなく、平易な文章に改められ、ときに挿画をともなった子ども向けの版で貧しい年少の子どもたちにも読まれていたし、ヘンリー・モートン・スタンリー（Henry Morton Stanley 1841-1904）の刺激的な伝記は、当時人気を博した海洋冒険小説と同様に、移民とアフリカに憧れる少年たちを夢中にさせた。<sup>1)</sup>

重要なのは、かれらのような立志伝中の人物となれるかどうかは別にしても、少年たちの夢が現実との接点を持つようになっていたことである。進路選択の幅が、少なくとも機会としては多様化した19世紀以降のイギリスにあって、少年期は学歴や職業の選択に直面する子どもたちにとって、ライフコースの分岐点として重要な意味を持つようになっていた。それは低い社会層にあって、より顕著な変化であった。父親と同じように地元の寒村で農作業に雇われるか、華やかな都会に出て別の雇用を求めるか。海軍や商戦の海員、あるいは移民として海に出るか。少女の場合でさえ、店員や交換手、あるいは教師や公務員となることで、家事奉公とその果ての釣り合う相手との結婚しか道のない母たちとは、まったく別の人生を歩むことも不可能ではなかったし、娘たちを上級の学校に行かせることで、その夢を後押しした母親も少なくなかった。それぞれの社会層において可能な範囲で、少年たちは経済的・社会的上昇に結び付くと思われる進路を、かなりの程度自らの、そして家族の意思のもと、現実的な制約は受けながらもある程度は選び採る、あるいは少なくとも夢見ることができるようになっていたのである。<sup>2)</sup>

駒込氏の著書からは、日本帝国統治下の台南という「場」の少年期の周辺にも、人びとの多様な夢が交錯していたことが読み取れる。駒込氏が中心に据えているのは教育者として、そして台湾人としての林茂生という一知識人の夢であるが、その周辺にもさまざまな夢があった。台湾に現地人の中等教育の場を設けた、イギリス長老派の教派としての勢力拡張の夢、アジアでの宣教と教育というキャリアを自らの個人的上昇につなげようとするスコットランド系イギリス人たちの夢、日本の統治下において長老教中学校に子どもを入れるという選択をした親たちの夢、そしていうまでもなく、この学校に通った生徒たち自身の夢である。

興味深いのは、これらの夢のそれぞれに、少なからぬ「ずれ」があったということであろう。駒込氏は、そもそもこの中学校には「不本意入学者」が多かったという事実を指摘されている。教師たちは、いわば入学の時点から夢をくじかれた状態にある生徒たちを受け入れ、彼らのモチベーションを上げて学業を継続させなければならなかった。経済的な事情もあって、中退者は多かったという。

一方で、生徒のなかには中退後にキリスト教系の内地の中学、大学に進んだ事例もあったというが、このようなケースはむしろ、生徒個人や親にとっては「夢」へのさらなる一歩であったとみることもできるのではないだろうか。林茂生はこのような「挫折」を惜しみ、台湾人の学校としてのアイデンティティを保持したままで、上昇への道をひらく学校の格上げを求め続けた。彼の努力は台湾人の教育者としての正攻法ではあろう。だ

が、現実問題として、個々の生徒たちが中学校ですごす期間は短い。林の遠大なライフワークの結実を待たず、生徒たちが自分自身の遠からぬ未来のために、台南長老教中学校を中退することで、上昇をめざすにしろそうでないにしろ、より現実的な進路を選ぶことはあっただろう。とりわけイギリス史の立場から興味深いのは、上昇をめざした生徒たちが、この時期の台湾という「帝国のはざま」にあって、長老教系／プロテスタント系／キリスト教系の、内地はもとよりカナダや合衆国にも広がるグローバルなコネクションを、この中学校と関わったことで「利用」しえたという点である。中退したケースも含め、このようなアクセスを可能にしたということは、台南長老教中学校が果たした大きな役割であり、その存在意義であっただろう。

### 3 規律化と少年団

イギリス子ども期研究の視点から興味深かった第二の点は、駒込氏の著書が扱っている時期には、欧米を中心に青少年を統制するさまざまな試みがグローバルに、かつ同時代的に展開していたという事実である。「はざま」にあった台南長老教中学校の生徒たちは、この潮流のなかでは、どのような状況にあったのだろうか。

少年期ないし青年期は、世紀転換期以降に「科学」の分析対象となり、その成果を裏付けとして、官民にわたって一すなわち政策や立法と民間のチャリティとの両面でさまざまな対策が講じられた。とりわけ関心を集めたのが、いまだ成長期にある少年の柔軟で不安定な心身が、将来的に有用にもまた脅威にもなりえるという両義性の指摘である。たとえばイギリスでは19世紀後半以降、成人犯罪者の行刑処遇がひと時代前の懲罰志向へと逆行した一方で、少年犯罪者については予防的措置を含めた感化や更生指導に官民で注力したが、その背景にあったのもこのような少年期観であった。

少年は危うく危険な年齢集団である。法や社会規範からの明白な逸脱行動だけではなく、道徳や身体、さらにはイギリス人という種としての退化、退廃的な娯楽への耽溺、急進主義や社会主義への傾倒といったさまざまなリスクを回避するために、とりわけ労働者階級の少年たちを、キリスト教精神にもとづく正しい教化と規律化によって統制し、しかるべき方向に導かなければならない。このような議論は世紀転換期に高まりをみせた。そのひとつの有効な手段として評価されたのが、地域・教派などを主体とする各種の少年団運動であった。

駒込氏が扱う時代と重なる世紀転換期から20世紀前半にかけて、少年団運動は欧米に

とどまらず、その支配下の植民地や、欧米の影響下にあった地域にも導入され、グローバルなスケールでの展開を組織化を急速に進めた。日本においてイギリス発のボーイ・スカウト運動が導入されたのもこの時期である。なお日本におけるスカウト運動の創始者とされているクラレンス・グリフィン（Clarence Griffin 1873-1951）は、北アイルランド出身で、幼少期から日本で育った商人の息子であった。彼のこのような出自と経歴は、明治日本という「帝国のはざま」で上昇の機会をうかがっていた、非イングランド系イギリス人たちの典型であることを指摘しておきたい。<sup>3)</sup>グリフィンはその後台湾に渡り教員を務めたと伝えられているが、これもまた帝国とその周辺地域を横断的に移動して活動し、その経験を自身の上昇に生かそうとした、いわゆる「お雇い外国人」を含めたこの時期のイギリス人の行動パターンに合致している。

グリフィンを端緒とする日本におけるスカウト運動は、第1回の世界スカウトジャンボリー（1920）への参加を経て、1922年に「少年団日本連盟」の結成にいたるが、ここで目を引かれるのは、初代総裁を19世紀末から台湾統治とその植民地経営に深くかかわったことで知られる後藤新平（1857-1929）がつとめたことである。なお朝鮮には内地と同年の1922年にスカウト支部が結成されている。スカウト運動の世界的な盛り上がりとその朝鮮での動き、そして後藤とグリフィンという台湾にゆかりを持つ人物がこの運動の中核にあったにもかかわらず、日本におけるスカウト運動の創生期に、台湾にはスカウト運動が導入されなかったことはきわめて奇妙にうつる。

内地における少年団運動は、その後性格を変えてゆく。日本の少年団運動は、乃木希典や昭和天皇（当時皇太子）とも会するなど、一時日本政府と蜜月関係にあった創始者ロバート・ベイデン＝パウエル of の構想と理想からは対英関係の悪化とともに離れ、ドイツのヒトラー・ユーゲントに近い全体主義的性格を持つ国家主義的な青少年組織として再編成されてゆく。台湾に最初に導入された少年団運動は、まさにこの再編後の少年団であった。台湾におけるいわば本家のスカウト運動が発足するのは1949年、亡命国民党政権下における、中国の既存団体の移転導入を待つことになる。

少年団にかんして、駒込氏の著書には、長老教中学校や内地のキリスト教系大学が排撃運動を受けた際、その主体に地元の「少年団」があったとの記述がある。日本治下の台湾でそのメンバーとなった台湾人の少年たちのアイデンティティはいかようなものであったのか。かれらが攻撃したものは、いったい何であったのか。

内地が中心であった日本帝国における少年団研究は近年広がりを見せているが、日本統治下にあった朝鮮と台湾におけるこのような状況の違いについて、教示を願いたいと

ころである。

#### 4 おわりに

子ども学の領域に歴史学の立場で身を置くものとしてしばしば感じるのは、研究者自身にもかけられた、子どもを受動的な存在とみなし、保護愛育の対象とする、近代以降の子ども観と子どもの理想像の呪縛の強さである。植民地主義や帝国主義というコンテクストの中で語られる子どもたちの物語は、さらにその性格を強めるといえるだろう。愛国教育や規律統制、あるいはロマンティックな大衆娯楽を通じ、「いたいけで無力なものたち」が帝国という構造の中にかに巧みに組み込まれ、翻弄されてきたか—支配された植民地側はもちろん、宗主国側をも無条件に被害者・犠牲者と位置付けるこのような視点は、女性史の領域では再考が進められて久しいが、こと子どもに関してはいまなお聖域であり続けている。駒込氏が紐解く「帝国のはざま」で、夢をしかと見据える長老教中学校の子どもたちの現実は、とりわけ植民地における「帝国少年」のイメージを、より自律的な存在とみることで書き換える可能性を持つのではないだろうか。

本研究は、JSPS 科研費 JP15K02966 の助成を受けたものです。

#### 注

- 1) 拙稿「職業としてのジャーナリズム—世紀転換期イギリスの少年雑誌にみる助言から」神戸市外国語大学『外国語研究』53, 127-141, 2001年。
- 2) 同前「「よきシティズン」になるために—『ボーイズ・OWN・ペーパー』にみるイギリスの少年期」小関隆編『世紀転換期イギリスの人びと—アソシエーションとシティズンシップ』人文書院, 第3章, 2000年。
- 3) 同前「「お雇い英国人」とイギリス帝国—植民地間移動の周縁としての日本」神戸女子大学史学会『神女大史学』(28), 67-88, 2011年。